

平成艸紙



おりおりの記

祖父のこと、父のこと

公益財団法人 山種美術財団理事長兼
山種美術館 館長

山崎 妙子

山種証券の創設者の祖父・山崎種二とは、私が一歳の頃から十数年間、共に住んだ。祖父は、父母や会社の人に厳しかったが、孫娘の私にはとても優しくかった。

毎朝、ポストまで新聞を取りに行き、祖父に届けるのが幼い私の日課であった。父や兄は朝早く出かけるので、祖父と母と私でゆっくりと朝食を食べる毎日だった。母が言うには、私を「妙ちゃん、妙ちゃん」と呼んで二人だけの世界にいるかのように可愛がってくれていたようだ。

私が小学校に行くようになってからは、帰宅すると祖父のいる和室に遊びに行っておしゃべりするのが楽しみであった。和室には、季節ごとに異なる掛け軸がかかっていた。この頃、祖父と見ていた絵が山種美術館に寄贈され、今では多くの方に楽しんでいただいている。祖父との楽しい生活の記憶にある日本画を本格的に勉強したいと考えたことが私の日本美術史研究の出発点である。絵を、そして画家との交流を大切にしたい祖父の姿が、幼い私にとって特別な意味を持っていたからであろう。

父の富治は、父をご存知の方が持つ温厚なイメージとは異なり、厳格な父親であった。「在平素」を座右の銘としており、自分にも家族にも厳しかった。その父を支えた母は、祖父と父が良好な関

係を持てるように、またいろいろな方々と良い交流ができるように心配りを欠かさなかった。そのことを父が喜んでいた姿を思い出す。父は

「一笑一若、一怒一老」も信条とし、人前では笑顔を絶やさず、ユーモアのある人だった。駄洒落が大好きで、思いついた時に書き留めるネタ帳まで持ち歩いていたほどである。それが報告・連絡・相談を大切にするという父の経営哲学「報連相」という有名な言葉を生むきっかけとなった。

「相場の神様」と呼ばれ、一代で立志伝中の人となった種二。二代目として山種証券を発展させたものの、時代の流れと闘いながら、後半生は山種美術館の充実に努めた富治。その二人に共通していたのは、人のご縁を大事にし、日本画を愛する心を持ち続けたこと、そしてどんな時も我慢強く耐えしのぶ日本人の心そのものだったのではないかと思う。昨年50周年を迎えた山種美術館が末永く愛される美術館となるよう、祖父や父を見習って努力していきたい。

